明暗

上

夏目漱石

明暗

上

夏目漱石

ほるぷ出版

市古貞次・小田切進＝編　日本の文学29

明　暗（上）

著　者　夏目漱石
責任編集　市古貞次（古典編）
　　小田切進（近代編）
発行日　昭和六十年八月一日　初版第一刷発行
発行所　株式会社　ほるぷ出版
　　代表　中森蒔人
　　東京都新宿区新宿二―十九―十三
　　電話（〇三）三五四―七〇三一（代）
総発売元　株式会社　ほるぷ
　　東京都新宿区新宿二―十九―十三
　　電話（〇三）三五六―六二一一（代）
製　作　東京連合印刷株式会社
　　印刷　大日本法令印刷株式会社
　　函・表紙印刷　共同印刷株式会社

目次

明暗（上）　1
注　503

明　暗

（上）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

一

医者は探りを入れた後で、手術台の上から津田を下した。

「矢張穴が腸迄続いているんでした。此前探った時は、途中に瘢痕の隆起があったので、つい其処が行き留りだとばかり思って、ああ云ったんですが、今日疎通を好くする為に、其奴をがりがり掻き落して見ると、まだ奥があるんです」

「そうして夫が腸迄続いているんですか」

「そうです。五分位だと思っていたのが約一寸程あるんです」

津田の顔には苦笑の裡に淡く盛り上げられた失望の色が見えた。医者は白いだぶだぶした上著の前に両手を組み合わせた儘、一寸首を傾けた。其様子が「御気の毒ですが事実だから仕方がありません。医者は自分の職業に対して虚言を吐く訳に行かないんですから」という意味に受取れた。

津田は無言の儘帯を締め直して、椅子の背に投げ掛けられた袴を取り上げながら又医者の方を向いた。

「腸迄続いているとすると、癒りっこないんですか」

「そんな事はありません」

医者は活潑にまた無雑作に津田の言葉を否定した。併せて彼の気分をも否定する如くに。

「ただ今迄の様に穴の掃除ばかりしていては駄目なんです。それじゃ何時迄経っても肉の上りこはないから、今度は治療法を変えて根本的の手術を一思いに

遣るより外に仕方がありませんね」

「根本的の治療と云うと」

「切開です。切開して穴と腸と一所にして仕舞うんです。すると天然自然割かれた面の両側が癒著して来ますから、まあ本式に癒るようになるんです」

津田は黙って点頭いた。彼の傍には南側の窓下に据えられた洋卓の上に一台の顕微鏡が載っていた。医者と懇意な彼は先刻診察所へ這入った時、物珍しさに、それを覗かせて貰ったのである。其時八百五十倍の鏡の底に映ったものは、丸で図に撮影ったように鮮かに見える著色の葡萄状の細菌であった。

津田は袴を穿いて仕舞って、其洋卓の上に置いた皮の紙入を取上げた時、不図此細菌の事を思い出した。すると連想が急に彼の胸を不安にした。診察所を出るべく紙入を懐に収めた彼は既に出ようとして又躊躇した。

「もし結核性のものだとすると、仮令今仰しゃった様な根本的な手術をして、

細い溝を全部腸の方へ切り開いて仕舞っても癒らないんでしょう」
「結核性なら駄目です。夫から夫へと穴を掘って奥の方へ進んで行くんだから、口元丈治療したって役にゃ立ちません」
津田は思わず眉を寄せた。
「私のは結核性じゃないんですか」
「いえ、結核性じゃありません」
津田は相手の言葉にどれ程の真実さがあるかを確めようとして、一寸眼を医者の上に据えた。医者は動かなかった。
「何うしてそれが分るんですか。ただの診断で分るんですか」
「ええ。診察た様子で分ります」
其時看護婦が津田の後に廻った患者の名前を室の出口に立って呼んだ。待ち構えていた其患者はすぐ津田の背後に現われた。津田は早く退却しなければな

らなかった。
「じゃ何時其根本的手術を遣って頂けるでしょう」
「何時でも。貴方の御都合の好い時で宜う御座んす」
津田は自分の都合を善く考えてから日取を極める事にして室外に出た。

二

電車に乗った時の彼の気分は沈んでいた。身動きのならない程客の込み合う中で、彼は釣革にぶら下りながら只自分の事ばかり考えた。去年の疼痛がありありと記憶の舞台に上った。白いベッドの上に横えられた無残な自分の姿が明かに見えた。鎖を切って逃げる事が出来ない時に犬の出すような自分の唸り声が判然聞えた。それから冷たい刃物の光と、それが互に触れ合う音と、最後に突然両方の肺臓から一度に空気を搾り出すような恐しい力の圧迫と、圧された

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

空気が圧されながら収縮する事が出来ないために起るとしか思われない劇しい苦痛とが彼の記憶を襲った。

彼は不愉快になった。急に気を換えて自分の周囲を眺めた。周囲のものは彼の存在にすら気が附かずにみんな澄ましていた。彼は又考えつづけた。

「何うしてあんな苦しい目に会ったんだろう」

荒川堤へ花見に行った帰り途から何等の予告なしに突発した当時の疼痛に就いて、彼は全くの盲目漢であった。其原因はあらゆる想像の外にあった。不思議というよりも寧ろ恐しかった。

「此肉体はいつ何時どんな変に会わないとも限らない。それどころか、今現に何んな変が此肉体のうちに起りつつあるかも知れない。そうして自分は全く知らずにいる。恐しい事だ」

此所迄働いて来た彼の頭はそこで留まる事が出来なかった。どっと後から突

き落すような勢いで、彼を前の方に押し遣った。突然彼は心の中で叫んだ。

「精神界も同じ事だ。精神界も全く同じ事だ。何時どう変るか分らない。そうして其変る所を己は見たのだ」

彼は思わず唇を固く結んで、恰も自尊心を傷けられた人のような眼を彼の周囲に向けた。けれども彼の心のうちに何事が起りつつあるかを丸で知らない車中の乗客は、彼の眼遣に対して少しの注意も払わなかった。

彼の頭は彼の乗っている電車のように、自分自身の軌道の上を走って前へ進む丈であった。彼は二三日前ある友達から聞いたポアンカレー*の話を思い出した。彼の為に「偶然」の意味を説明して呉れた其友達は彼に向って斯う云った。

「だから君、普通世間で偶然だ偶然だという、所謂偶然の出来事というのは、ポアンカレーの説によると、原因があまりに複雑過ぎて一寸見当が附かない時

に云うのだね。ナポレオンが生れるためには或特別の卵と或特別の精虫の配合が必要で、其必要な配合が出来得るためには、又何んな条件が必要であったかと考えて見ると、殆ど想像が附かないだろう」

彼は友達の言葉を、単に与えられた新しい知識の断片として聞き流す訳に行かなかった。彼はそれをぴたりと自分の身の上に当て嵌めて考えた。すると暗い不可思議な力が右に行くべき彼を左に押し遣ったり、前に進むべき彼を後に引き戻したりするように思えた。しかも彼はついぞ今迄自分の行動に就いて他から牽制を受けた覚がなかった。為る事はみんな自分の力で為、言う事は悉く自分の力で言ったに相違なかった。

「何うして彼の女は彼所へ嫁に行ったのだろう。それは自分で行こうと思ったから行ったに違いない。然し何うしても彼所へ嫁に行く筈ではなかったのに。そうして此己は又何うして彼の女と結婚したのだろう。それも己が貰おうと思

ったからこそ結婚が成立したに違いない。然し己は未だ嘗て彼の女を貰おうとは思っていなかったのに。偶然？　ポアンカレーの所謂複雑の極致？　何だか解らない」

彼は電車を降りて考えながら宅の方へ歩いて行った。

三

角を曲って細い小路へ這入った時、津田はわが門前に立っている細君の姿を認めた。其細君は此方を見ていた。然し津田の影が曲り角から出るや否やすぐ正面の方へ向き直った。そうして白い繊い手を額の所へ翳す様にあてがって何か見上げる風をした。彼女は津田が自分のすぐ傍へ寄って来る迄其態度を改めなかった。

「おい何を見ているんだ」

細君は津田の声を聞くと左も驚いた様に急に此方を振り向いた。
「ああ吃驚した。――お帰り遊ばせ」
同時に細君は自分の有っているあらゆる眼の輝きを集めて一度に夫の上に注ぎ掛けた。それから心持腰を曲めて軽い会釈をした。
半ば細君の嬌態に応じようとした津田は半ば逡巡して立ち留まった。
「そんな所に立って何をしているんだ」
「待ってたのよ。御帰りを」
「だって何か一生懸命に見ていたじゃないか」
「ええ。あれ雀よ。雀が御向うの宅の二階の庇に巣を食ってるんでしょう」
津田は一寸向うの宅の屋根を見上げた。然し其処には雀らしいものの影も見えなかった。細君はすぐ手を夫の前に出した。
「何だい」

「洋杖」

津田は始めて気が附いた様に自分の持っている洋杖を細君に渡した。それを受取った彼女は又自分で玄関の格子戸を開けて夫を先へ入れた。それから自分も夫の後に跟いて沓脱から上った。

夫に著物を脱ぎ換えさせた彼女は津田が火鉢の前に坐るか坐らないうちに、また勝手の方から石鹸入を手拭に包んで持って出た。

「一寸今のうち一風呂浴びて入らっしゃい。また其処へ坐り込むと億劫になるから」

津田は仕方なしに手を出して手拭を受取った。然しすぐ立とうとはしなかった。

「湯は今日は已めにしようかしら」

「何故。――薩張りするから行って入らっしゃいよ。帰るとすぐ御飯にして上

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo